

## モノと情報班

### 南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史・文化調査団コレクション

木田歩（南山大学人類学博物館・名古屋大学大学院人間情報学研究科）

キーワード：上智大学西北タイ歴史・文化調査団、白鳥芳郎、ヤオ文書、民族資料、映像資料、  
南山大学人類学博物館

The Collection of Sophia University's Research Party in Anthropological Museum of Nanzan University

Ayumi, KIDA (Anthropological Museum of Nanzan University • Graduate School of Human Informatics,  
Nagoya University)

Keywords: Sophia University's Research Party of History and Culture in Northwestern Thailand, Yoshiro  
SHIRATORI, Anthropological Museum of Nanzan University

## 要旨

人類学・民族学における学術的資料が、2000年に上智大学から南山大学人類学博物館に寄贈された。これらは、白鳥芳郎を団長とし、1969年から1974年にかけて3回おこなわれた「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」が収集した資料である。本報告では、まず、調査団の概要について、白鳥による研究目標をもとに説明し、次に寄贈された資料を紹介する。最後に、今後の調査課題と研究の展望について提示する。

## 1. はじめに

報告者を含め、南山大学人類学博物館に勤務するスタッフ（黒沢浩、安藤さおり、須山成彦、山崎剛）の5名は、2006年度からプロジェクトメンバーとして「モノと情報」班に参加することとなった。「モノと情報」班では、博物館に収蔵されている資料を、プロジェクト対象地域の生態史の動態を把握するための重要な指標とみなし、すでに班全体報告で指摘されているように〔秋道・久保・田口 2004〕、当館には上智大学西北タイ歴史・文化調査団コレクション（以下、コレクション）が収蔵され、プロジェクトへの協力要請が寄せられたためである。また、当館としては、研究調査活動に直接関与した資料ではないことを鑑みれば、本コレクションに対して、他機関との連携や多くの研究者の協力のもと、多角的な視点で研究がおこなわれることは、新たな研究や課題の発見へと繋がると考えている。

本コレクションは、収集を目的とした結果としてではなく、研究調査活動の一環として収集された資料であるため、コレクションの特徴を理解する上で、調査団の研究活動について把握することは不可欠なことであろう。本報告では、まず、上智大学西北タイ歴史・文化調査団の概要を紹介し、つぎにコレクションが当館に移管された経緯と当館での調査研究活動について述べ、最後に今後の課題について提示したい。

## 2. 白鳥芳郎と上智大学西北タイ歴史・文化調査団

上智大学西北タイ歴史・文化調査団の結成には、団長であった白鳥芳郎の影響が甚大であったといっても過言ではない。なぜならば、白鳥が関心を寄せた研究テーマがその出発点となっていたからである。そして、それは本プロジェクトの1945年から2005年という対象期間を越え、戦中へと遡る。

白鳥〔1985〕によれば、東京帝国大学文学部東洋史学科在籍中の1940年代初頭当時、第二次世界大戦の進展に伴い、急速に東南アジア諸国の歴史や民族への関心が国際的に高まりつつあった。北アジアの研究は日本の東洋史学者によってすでにおこなわれていたものの、中国南部の民族や文化に関する研究は僅少であり、殆ど未開

拓の状況であった。白鳥は、この華南の地を中国史の一部でもあり、東南アジア史の一部でもある研究領域と捉え、華南に住む民族の歴史と文化の系譜に関する基礎的調査をおこない、華南史を復元することを研究目標とした。

ところが、研究を進めていくうちに、中国南部には多種多様な民族が居住し、こうした諸民族に関する文献記録が非常に少なく、かつ、その記述も断片的なものが多いことに気づき、各民族の系譜を歴史的に体系づけることが困難であることを痛感した。

当時これら諸民族に関する西ヨーロッパの民族学者や言語学者の研究がすでに蓄積されており、特にウィーン大学のいわゆる文化史学派の研究に注目した白鳥は、1959年から1962年にウィーン大学民族学研究所に留学し、民族学の目的と方法を吸収した。この経験から、東洋史学と民族学を融合させた学問分野の開拓を志し、中国の南部・西南部と地理的にも近接し、また、民族の分布や文化の交流の上からも密接な繋がりを有していると考えられる西北タイを調査地を選び、実地調査を構想していった。

そこで、白鳥は、1967年の12月初旬から約2ヶ月、予備調査のため単身タイへ向かい、まず、タイ民族や山地諸民族の研究がどのように進められ、どのような研究者が従事しているのか調査するために、タイ・ラオス両国の大学、研究機関を視察し、また、西北タイのチェンマイ州、チェンライ州のメオ＝ライ族、カレン族、ラワ族、アカ族、ヤオ族といった山地諸民族を探訪した。そして、ヤオ族が、華中・華南の基層文化の担い手であり、歴史的観点からもヤオ族の持つ社会・文化の構造ないし実態を把握することは、今後における華南、東南アジア史研究の上で大きな意味を持つと認識するに至り、北部タイ或いはラオス、周辺諸地域に生活形態を保持して行動するヤオ族を中心とした西北タイの山地諸民族の調査を本格的に計画することとなった〔白鳥 1969〕。

そして、第一次調査として、文部省より科学研究費補助金の交付を受け、海外学術調査「メナム河上流（メーピン河）地帯における山地および平地諸民族の交錯過程の実態的調査」を課題に、山地諸民族の民族学的調査が実施された。1969年11月中旬から1970年3月末までの約4ヶ月、タイ国西北部チェンライ州、チェンマイ州、タック州を中心に、当時上智大学教授であった白鳥芳郎を団長に、同学教授八幡一郎、同学講師量博満、同学助手中塚発夫、東京都立大学助手竹村卓二、同学大学院生比嘉政夫の6名のほか、上智大学新聞学科学学生鄭仁和が特別参加し、計7名の団員によって調査がおこなわれた。

調査の目標は、山地諸民族の社会や文化の実態を正確に把握し、その理解・認識にもとづいて、華南・東南アジアの土着住民の種族系譜及び文化の系統を歴史的に復元することであった。そのため歴史民族学的研究方法を応用し、一般的調査項目として、種族史（起源説話、移住経路、文献もしくは口碑による伝承文化財の採集）、

宗教・儀礼（崇拜対象、神話伝説、祭祀組織、世界観）、社会組織（村落組織、家族・親族体系、婚姻体系、土地・財産制度、法的慣行、政治・権力構造）、経済形態と生活技術（焼畑と水稲農業の経営実態、農林畜産の技術、市場・交易などの流通機構、各種生活用具の製造技術と販売システム、換金作物と貨幣経済の浸透）の4点を挙げ、さらに、重点項目として、ヤオ族とメオ族の種族的親縁関係、リス族・アカ族・ラフ族などチベット・ビルマ系諸種族の種族史的相互関係、ホー族（雲南系中国人）の山地民社会における政治的・社会的・経済的役割、ヤオ族の保存する漢字による文書の収集、以上4点に注目した。

結果的にはメオ族について本格的な調査は実施されなかったが、アカ族、ラフ族、リス族、ホー族や、チェンマイ州やメーサリエン州のラワ族、カレン族についても短期間の調査をおこなった。また、約2ヶ月半をかけてヤオ族パーレー村で集中的に調査をおこなった。因みに、パーレー村はメコン河の支流メーサロン河が沖積平野に出る手前の標高約400mの山麓部に位置し、交通上の要衝であるばかりでなく、政治的にも重要であり、さらに、メーチェン管内の山地民族社会にとって経済活動においても一つの中心であったという。

そして、今次の調査で、ヤオ族を含めた諸種族の男女の衣裳をはじめ、各種の農具、狩猟具、織機等の民族資料約400点が収集された。これらは、八幡一郎の熱心な指導のもと、団員が協力して収集したという〔白鳥 1971〕。

また、本調査団の収集した資料の特徴の一つが、ヤオ族の漢字文書である。ヤオ族は、東南アジア大陸部の山地民族のなかでメオ族とともに中国文化の影響を濃厚に受け、とりわけ漢字文書の普及度が高く、ヤオ族各家に、祖先の身元を記録した戸籍簿が保存され、有力な司祭者や首長の家には宗教上の経典や成文化された慣習法が伝えられていたが、そうした各種の文書を数千コマに達するフィルムに採集した〔白鳥・竹村 1970〕。

1971年には、第二次調査として、再度文部省科学研究費補助金の交付を受け、海外学術調査「メナム河上

流（メーピン河）地帯における山地および平地諸民族の交錯過程の実態的調査（第二次）」を題目に、山地民族、特にヤオ族とメオ族に対する集約的調査と、両種族の相関関係ならびに他種族との関係の調査をおこなった。1971年10月中旬から翌年2月上旬まで、北部タイのチェンマイ州、チェンライ州、ランバン州を中心に、白鳥団長、八幡一郎、量博満、中塚発夫、竹村卓二、比嘉政夫の6名に加え、淑徳大学助教授常見純一、十文字学園教諭喜田幹生、上智大学大学院生高一男、東京大学技官鈴木昭夫の4名、計10名が調査に参加した。調査日程としては、11月初旬～中旬、ランバン州ガオ県ポーシリウム村でのヤオ族調査、11月下旬～12月上旬、チェンライ州ヴィエンパオ県メエタラ村を中心としたメオ族調査、12月中旬～下旬、チェンライ州メエサイ県（当時ピルマ領）のメエチュウ村でのメオ族調査、1月上旬～中旬、チェンマイ州コンロイ県メエトー村でのメオ族調査、1月中旬～2月上旬、チェンライ州メーチェン県パーレー村等でのヤオ族の補足調査がおこなわれた。その他に、チェンライ州のアカ族、リス族、ホー族、シャン族、ラフ族、チェンマイ州のラワ族、さらに、ラオス領でランタン・ヤオ（藍靛僑）族も補足的に調査した。

今次も第一次調査と同様の調査目標と一般的調査項目が掲げられたが、重点項目として、ヤオ族社会の構造、ヤオ族の保存する漢字文書収集、メオ族の全体像、ヤオ族とメオ族との種族史的关系、ヤオ・メオ両種族と他種族との種族史のおよび社会・経済的关系、へ関心を注いだ。

調査の結果、長さ6m40cm、紙巾44cm、184行にわたる長文で、ヤオ族の特許状「評皇券牒」を発見し、儀礼用の経典と各家の家譜を記した漢字文書を撮影した。また、宗教・儀礼に関しては、ヤオ族の年中行事及び通過儀礼等を中心にデータを収集した。そして、ヤオ族の儀礼に用いられる十八神画像の掛図（道教的影響を受けた極彩色の紙製掛図で、縦105cm、巾42cm程度のもの18枚、ほかに小型のもの若干枚）を一セット入手した。

加えて、白鳥と喜田がラオス領内のランタン・ヤオ族を調査し、彼等も漢字文献を有することが判明した。

こうして、ヤオ族の文書資料の他、各種族の伝統的衣装を含む民族資料を大量に収集し、山地民族の生活全般にわたる写真資料（カラー・白黒）も多数得、8ミリ（カラー）映像の撮影もおこなわれた〔中塚 1972〕。

さらに、1973年12月中旬から1974年2月上旬にかけて、西北タイ、チェンライ州チェンライ市にベースキャンプを構え、白鳥芳郎、江上波夫、量博満、中塚発夫、高一男の5名の団員による第三次調査が実施された。今次はヤオ族文書の収集並びにメオ族村落の民族学的調査の遂行が目的であり、また、山地民族と接触交流のある山麓平地民村落についても調査し、白鳥・江上は平地民タイ・ルー族村落を、残りの団員はチェンライ州を中心とした平地農村にみられる土器作製の技術文化調査に専念した。特に、今次の調査中に「評皇券牒」の現物を入手したことは、学術上非常に貴重であったという〔白鳥 1974〕。

以上、白鳥による予備調査（1967.12～1968.1）と、上智大学西北タイ歴史・文化調査団（第一次調査：1969.11～1970.3、第二次調査：1971.10～1972.2、第三次調査：1973.12～1974.2）に関する概要を紹介したが、本調査を通して、「評皇券牒」を含んだ漢字文献であるヤオ族文書の複写、物質文化としての民族資料、写真資料や8ミリフィルムが収集されたことが伺える。なお、ヤオ族漢字文書の一部と「評皇券牒」、十八神画像を編集した『僑人文書』〔白鳥（編）1975〕と、調査団の報告書として『東南アジア山地民族誌』〔白鳥（編）1978〕が刊行されている。

### 3. コレクション移管の経緯と寄贈資料

2000年8月、上述した調査団の収集コレクションが、上智大学から南山大学人類学博物館に移管された。当時、資料の受入れに直接関与し、博物館担当教官であった重松〔2004〕によると、上智大学に在籍する最後の調査団員となった量氏が定年退職するにあたり、コレクションの保管が問題となり、同じカソリック系の大学で親しい関係にあること、調査団長の白鳥芳郎が南山大学人類学研究所の客員研究員（1982-1988）・非常勤研究員（1988-1991）として在籍されたこと、民族学資料を所蔵する人類学博物館があること、以上3点を理由に、資料が当館に寄贈されたという。

寄贈された資料として、まず、民族資料があり、受入れ直後から、これらの資料整理がおこなわれた。第一次調査には「採集品目録」の台帳ノートがあり、分類項目として、No., Date, Tribe, Locality, Sort, Native name, Material, Collector, Note が設けられ、一方、第二次調査には「標本台帳」のノートがあり、番号、年月日、品名、素材、数量、採集場所、製作所、使用種族、土語名称、使用法、価格その他の項目がある。上智大学での

資料管理用の荷札の脱落・混在のため、当館での登録番号（JCと4桁の数字で表記）を新たに注記し、台帳をエクセルで作成した。寄贈された民族資料は、民族衣装、生活用具、楽器、信仰関係の資料を中心に、約1700点の資料数となり、仮台帳として、JC番号、旧1、旧2、日付、地名、民族、名称、備考1（特徴1）、備考2（荷札の内容他）の項目に分類され、それぞれの資料写真を添付したCD-ROMが作成された。なお、これらには、約250点の香港、約20点の日本の資料が含まれている（表-1参照）。

そして、民族衣装を中心に一部の資料を公開し、それら展示資料について、当館の特別嘱託職員であった後藤により報告がおこなわれた[2004 2005 2006]。また、臨時職員であった久慈は、ラウ族の土器作り関連資料を通して、叩き技法について考察をおこなった[2005]。

残りの資料に関しては、現在整理作業がおこなわれている。報告者が確認したところ、以下の資料が寄贈されている（なお、写真資料の詳細に関しては、本報告書の山崎[2006]参照）。

#### 写真資料

35ミリのカラーズライド。第一次調査と第二次調査で撮影したスライドに関しては台帳が存在し、多くのスライドマウントに整理番号が表記されている。なお、台帳には撮影者の識別可能な整理番号、現像状態、撮影者、撮影年月日、撮影場所、撮影内容、使用、処理・備考の項目が設けられている。その他、民族とテーマ別に分類され、カードに添付された大量のプリントモノクロ写真とネガフィルム。

#### ヤオ文書資料

写真複写資料とネガフィルム、マイクロ・フィルム。

#### 8ミリフィルム

調査団撮影のフィルムとその台帳。2003年、その一部を、撮影者である鈴木氏のご協力を得、東京大学青柳正規教授代表の特別研究グループのもと、DVDとしてデジタル化をおこなった。

#### 音声テープ

第一次調査団の音声テープが12本、その他不明のテープが数本。

#### 事務文書

調査団に関連する様々な書類・文献。日誌もあり。

表-1 上智大学西北タイ歴史・文化調査団寄贈資料（民族資料）点数一覧

番号	資料番号	収集地	点数	備考
1	JC0001-0058	西北タイ	57	主に土器類、欠番あり
2	JC0059-0099	欠番		
3	JC0100-1224	西北タイ	1116	主に装飾品、農具、狩猟具、欠番あり
4	JC1225-2000	欠番		
5	JC2001-2236	香港	236	主に龍舟祭から
6	JC2237-3000	欠番		
7	JC3001-3061	西北タイ	61	主に楽器
8	JC3062-4000	欠番		
9	JC4001-4021	日本	21	
10	JC4022-5000	欠番		
11	JC5001-5061	西北タイ	54	図像資料、欠番あり
12	JC5062-6000	欠番		
13	JC6001-6117	不明	117	主に青銅製品
			合計 1662	

(2006.04.26 報告者作成)

#### 4. 今後の課題

以上、上智大学西北タイ歴史・文化調査団の概要と、当館に寄贈されたコレクションについて基礎的な報告をおこなった。最後に、次年度の調査課題と将来的な研究の展望について触れておきたい。

今年度、プロジェクトメンバーへの博物館資料の共有化のため、約6350コマの35ミリカラースライドのデジタル化をおこなった。そこで、来年度は、まず、その資料のデータベース化やアーカイブズを視野に入れたデータ作成作業をおこなう。

また、その他の写真資料や音声テープ、事務文書等に関して、保存作業を含めたデジタル化をおこなっていききたい。

さらに、台帳などが残っていないコレクションの情報化のために、調査団員であり、コレクション収集者でもある量氏や鈴木氏への聞き取り調査をおこなっていききたい。

そして、既述したように、調査団やコレクションの誕生には、当時の人類学的関心や課題が大きく影響している。そのため、本コレクションを通して、民族学研究史の考察をこころみたいと考えている。

#### 参考文献

- 秋道智彌・久保正敏・田口理恵 2004 「アジア・熱帯モンスーン地域における生態史のなかのモノと情報 時空間軸をベースとするマルチメディア・生態誌アーカイブズの構築を目指して」『総合地球環境学研究所 研究プロジェクト4-2 2003年度報告書』259-279。
- 後藤真里 2004 「ヤオ族の暮らし(1960年代後半～70年代) 上智大学より移管された西北タイ歴史・文化調査団資料より」『南山大学人類学博物館紀要』22:11-16。
- 後藤真里 2005 「タイ西北部山地に暮らす人々 上智大学から移管された西北タイ歴史・文化調査団資料より」『南山大学人類学博物館紀要』23:14-39。
- 後藤真里 2006 「タイ西北部山地に暮らす人々 上智大学から移管された西北タイ歴史・文化調査団資料より」『南山大学人類学博物館紀要』24:1-18。
- 久慈大介 2005 「叩き技法を用いた土器作り 西北タイ Lawa 族の土器作り資料の紹介を通して」『南山大学人類学博物館紀要』23:41-64。
- 中塚発夫 1972 「第二次上智大学西北タイ歴史文化調査団の成果 略報」『上智史学』17:83-91。
- 重松和男 2004 「上智大学からの移管の経緯と資料内容」『南山大学人類学博物館紀要』22:14-15。
- 白鳥芳郎 1969 「研究ノート 西北タイ山地民族探訪の記録 タイ国における歴史・民族学の研究現状」『上智史学』14:119-138。
- 白鳥芳郎 1971 「上智大学西北タイ歴史・文化調査団報告」『上智史学』16:129-132。
- 白鳥芳郎 1974 「研究ノート タイ・ルー族(Sip Son Panna)村調査の覚書 第三次西北タイ調査ノート」『上智史学』19:78-87。
- 白鳥芳郎 1985 『華南文化史研究』六興出版。
- 白鳥芳郎(編)1975 『傜人文書』講談社。
- 白鳥芳郎(編)1978 『東南アジア山地民族誌』講談社。
- 白鳥芳郎・竹村卓二 1970 「研究ノート 上智大学西北タイ歴史・文化調査団の成果 略報」『上智史学』15:121-128。
- 山崎剛 2006 「南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史・文化調査団コレクション 写真資料」『 - 』。

#### Abstract

In 2000, an important collection for the study of anthropology was transferred to the Anthropological Museum

of Nanzan University from Sophia University. This was from the three expeditions of Sophia University's Research Party of History and Culture in Northwestern Thailand between 1969 and 1974 headed by Prof. Yoshiro Shiratori. In this report, the first introduces the fundamental information of the expeditions, with special attention given to the purpose of research by Prof. Shiratori. The second shows the process of the donation of the collection. Then, further directions for research are suggested.